

## 新たな関連を求めて

—ハントケの「4部作」(3)—

澤岡 藩

文章を書くことでしか外界との調和をたもてないということを、作家というものの一つの属性とすれば、ハントケの場合はまさにその属性が他の全ての属性を圧倒しているといえる。しかし外界との調和という言い回しからうかびあがる、外から受けた傷を癒す、といったイメージが表面にでて作品を支配しているわけではない。確かに登場人物の背景には、離婚した妻を捜しアメリカを旅したり、母の死ののちその生涯をふりかえることで一作品を作りあげたり、ハントケその人の影が見え、書くことで癒されることが心理的には動機となっているかのようにみえる作品がほぼ全てである。しかし相当数の作品を持ちながらそのような内容が明瞭に一つのストーリーとして前面に浮かび上がる印象が強い作品は無い。そこには確実にまた別の意志が働いているからだ。その意志の陰では作品のきっかけとなるストーリーはただのきっかけにしかみえない。

自分の現実における体験が、表現されたものと齟齬を生じることを回避するための方策を彼は首尾一貫して追求してきた。彼にとっては内容を伝えることではなく、形式と一体化した内容が表現として現実とどう関係しているかにしか興味がないようだから、それも当然のことといえるが、その執拗さには驚くべきものがある。それはまた作家として必然のこととも言えるのだが、あまりの偏執ぶりはなにによるのか。皮肉なことにそのせいで彼の作品の総体から蓄積される印象はややぼやけていると言っても良い。本来表現の純粹性、無垢性

を狙ったはずの手法が、そこに投入された論理、ハントケが最も嫌った観念の作品支配を排除するための論理のために、逆に作品全体の彫塑的に明確な印象を妨げ、抽象的な霧となって作者の意図を裏切ってはいないだろうか。ここでは幾分批判的な立場に立ってひき続き『サント・ヴィクトワール山の教え』を題材にしてその点を検討してみる。

ヨーゼフ・クヴァックの次のような言及は、その点をわかりやすく説明している。彼は例として、なかなか普通では体験できないエヴェレストへの登頂の記録、あるいはまたドラッグの経験を述べた文章などが、その経験の実質を少しも伝えてくれないことをあげる。そのような特権的な体験もそれに相応した表現を見いださなければなんの価値があるだろう、と彼は述べて、ハントケは『サント・ヴィクトワール山の教え』で「緊張した、精密な文章で」そのことを追求していると指摘する。<sup>1)</sup> そこでエヴェレストの例がとられたのは偶然ではなく、作品中の次のような言及による。

Es gab kein Gipfelerlebnis; – und ein berühmter Bergsteiger fiel mir ein, der, für seine Ekstase auf dem höchsten Punkt der Erde, dann im Buch dazu die Wahrnehmungen eines anderen (keines Bergsteigers) verwendete, die dieser beim Dahingehen in fast ebenen Vorstadtstraßen notiert hatte, kaum hundert Meter über dem Meer. (LSV67)

いささか皮肉が混じってはいるが、不十分な表現に対するハントケのいらだちと批判は読みとれる。

またゲルハルト・メルツァーは、セザンヌが、ものの本質を自分の主観性でねじ曲げたり単なる表面上の特性で描いたりしないために、毎日、時には何ヶ月も、木や崖や山を見続けたことを紹介して、ハントケのものの見方と比較しながら次のような言及をしている。

Offenkundig zielen beide Künstler [...] auf eine Akzentverschiebung im Wechselspiel von Gegenstand und Betrachter, die dazu führt, daß Erscheinungen zwar angeschaut, aber nicht gesehen werden.

Diese Doppelsinnigkeit zeigt sich als Gegensatz zwischen einem bloß registrierenden Sehen und einem Sehen im gesteigerten, emphatischen Sinn.<sup>(2)</sup> (下線筆者)

このハントケ独特のというにはいくらか留保が必要かもしれない二重性を持ったものの見方の具体的な内容はたとえばエレン・ディンターが指摘する以下のような説明とも重なるものだ。

「形態の王国」の中で作者の問題意識に浮かび上がることは「個人としてこの王国の中にはいりこむ権利を与えるものは何か (LSV27)」という問いであり、この作品のテーマはその問いに答えることだ。「ハントケは二通りの方法でその問いに近づく。スピノザとセザンヌにその拠り所を見いだしながら、作者は直接かつ突然に作用する感情の表出と結びついた簡潔な描写として、彼の職業的体験を描き出し自分が作家として生きる決意を展開する。」<sup>(3)</sup> (下線筆者)

圧倒的な力を持つモノの作用は、『ペナルティーキックを受けるゴールキーパーの不安』以来、絶えず何か秘教的なものとして「形態の王国」を形づくり、この作家を圧倒してきた。したがって彼の目的はその王国に参加すること、まるで自分の文章が書き手の主体を消し去られたモノとして成立すること、と言っても良い無垢性を確立することだった。そして下線部に簡潔ではあるが、わかりにくくまとめられているここでの手法は、とくになにも意味がないとみられるある一風景、点描と、その簡潔な描写が作家としての語り手にどんな作用をもたらすかの二重性を示唆して、先のSehen im gesteigerten, emphatischen Sinn

と重なるものだ。

とりあえず上記引用中の、個人としてこの王国の中にはいりこむ権利を与えるものは何か、という問いへの解答として与えられていて、またよく引用される作品中での部分についてしばらく検討してみよう。

1) Einmal fühlte ich aber doch die Berechtigung – noch bevor ich überhaupt etwas geschrieben hatte. Ich erschaute das Thema, und damit das ersehnte ‚Buch‘, und die Bücher.[...] Wir fuhren in einer leichtgewellten Gegend auf einer ziemlich geraden Landstraße, an einem Sonntag im Spätsommer, in Oberösterreich. Die Straße war leer. Nur einmal ging auf der anderen Seite ein Mann, in weißem Hemd und schwarzem Anzug. Die Hosen waren weit und schlungen ihm beim Gehen um die Beine; als wir später zurückfuhren, ging der Mann da immer noch, mit den um die Knöchel flatternden Hosen und aufgeknöpftem Rock, am Sonntag, in Oberösterreich, zu meiner Freude. Dem ich meines ersten Buches war es dann bei dem Anblick eines so Dahingehenden, als sollte er unter die Leute gehen und ihnen etwas sagen. Er würde mit Gewalt und Donner unter sie fahren und sie überzeugen. Fing demnach gar nichts Neues an mit den pins parasol von 1974, sondern kam eher etwas zurück, das ich, in der Wiederkehr, als, Das Wirkliche‘ begrüßen konnte? (LSV27f)

ある作品を書く前にこの作家が Berechtigung を必要とすることは、ここの引用ばかりでなくくり返し書かれる。そもそもこの『サント・ヴィクトワール山の教え』という作品を書くことの‘正当性’、この作品を書くことを‘可能にする権利’についても作品の半ばで示される。

2) Von jenm Weg leite ich auch das Recht ab, eine » Lehre der Sainte-Victoire « zu schreiben. (LSV68)

ハントケが新たな作品を書くさいに、いつも自分は好意的に沈黙する読者にすぎないと感じ、この王国の中で個人として寄与するための権利をなにが与えてくれるのかという問いに常に頭を悩ましてきた、とも語られているが、この反復される正当性への言及から読みとれることは、その正当性が実現するのは、語り手の外界との体験がある種の条件を満たしたときであろうという予想はできる。実にこの作品はその体験の描写の集積でできているといってもよい。しかし、引用1)にみられるように、作者がまだそもそも作品を書き始める前にこれから書こうとする作品のテーマのヴィジョンを得たという経験は理解できるとしても、その課程の描写は、あのエヴェレストやドラッグの体験の描写の場合と質的なへだたりがあるのだろうか。圧倒的なモノの王国に対して関与する権利を得たと作者が感じる瞬間の描写として十分納得がいくものといえるのか、という印象は筆者の率直なものである。ここに述べられた男の姿が語り手の中に起こした動きを実感することはそう容易くはないとおもえる。

この作品そのものを書くきっかけを得たのが次のような箇所からであることも同時に見ておく。

Als ich mich dann von der ersten Hochfläche nach dem Berg umschaute, glänzten seine Flanken schon wieder festlich (eine Stelle leuchtete geradezu, wie von einer Marmorader) ; und beim nächsten Blick zurück, tief unten in einem Pinienwald, schien seine Helligkeit durch die Baumspitzen wie ein dort hängendes Brautkleid. Im Weiter gehen warf ich einen Apfel auf, der sich in der Luft drehte und meinen Pfad mit dem Wald und den Felsen verband. (LSV67-68) (下線筆者)

歩きながらりんごを投げその軌跡が森の中の自分の道と岸壁を結びつけるというイメージは、そう凡庸なものではない。しかし引用2)にあるように、そ

の道筋からこの作品を書く正当性を得たとなるといささか神秘性を帯びると言える。

しかし、そこがこの作品の眼目であることも疑えないところだ。この作品がセザンヌをめぐってのものであることもそれを裏付ける。

ディンターの指摘はここでも二つの点にわたる。一つは引用1) にみられる男の形姿にハントケが希求する poeta-vates としての姿を見てとることだ。mit Gewalt und Donner という表現から、たとえハントケのイメージがどれほどかけ離れていようとツァラツストラを思い出すことは確かにそう難しくはない。また直接「人々のあいだに分け入って何かを伝える」とも書かれている。ハントケが作家のそういった姿にある種の作家の理想を見いだしていたことは、『村をこえて』を検討するときにもまた扱うことになるだろうが、ハントケが自分の作家としてのイメージをその男の形姿から受け取ったことが、第一の点である。

引用文中 pins parasol von 1974 とあるのはこの箇所の少し前の次のような文章である。

3) In der steinigen Landschaft wuchsen schütter die Mittelmeerpiniën. Deren besonderen Namen, der mir wie ein Refrain, mit der Jahreszahl 1974, oft wiedergekehrt ist, habe ich von der Frau: Pins parasol . Die Straße führte leicht abwärts an ihnen vorbei. Da (nicht » plötzlich «) , mit der Straße und den Bäumen, stand die Welt offen. » Da « wurde auch woanders. Die Welt war ein festes tragendes Erdreich. Das Offene kann, immer wieder, auch ich sein. [.....] In einer Erzählung, die ich ein halbes Jahrzehnt davor geschrieben hatte, wölbte sich einmal eine Landschaft, obwohl sie eben war, so nah an den Helden heran, daß sie ihn zu verdrängen schien. Die ganz andere, konkav geweitete, vom Druck entlassende und den Körper freidenkende Welt von 1974 steht jedoch immer noch vor mir, als

weiterzugebende Entdeckung; die Schirmpinien und meine Daseinsfreude, das ist geltende Wirklichkeit. (LSV23-24) (下線筆者)

この箇所は1974年の南フランスの旅での経験についてであり、引用1)の下敷きとなっているのだが、自分自身が開かれ、その時代のある瞬間の現実に着に直面した体験を、セザンヌがしたように「教え」として表現に定着させたいという願いが読みとれる。問題はこの二つの体験、というより点描に対する語り手の印象が、語り手の中に変化を起こし自分が書くことの根拠にまで高めることになる課程を、どの程度まで読者が納得できるのかということにある。

ところでディンターの指摘のもう一方は、あの男のもう一つの形態が、後に *Regel des Spiels und Spiel der Regel*, wie einst der Gehende mit der flatternden Hose in Oberösterreich (LSV52) として言及される一面を持っていることだ。その黒い上着に白いシャツの男は、その出現の継続性、その再びの出現を体験するさの継続性により、存在のルールとして想像されている。

ハントケに従えば、鑑賞者あるいは読者が語られたことの真実性に根拠をもてるように、あらゆる芸術家は現実の知覚と分析から形式を作り上げなければならない。ハントケはそのためにスピノザの倫理学を援用して自分が関与したい「形態の王国」をどう理解すべきかを説明しようと試みる。『サント・ヴィクトワール山の教え』では繰り返し「あの哲学者 (der Philosoph)」についての言及がある。慣例によりアリストテレスをさすわけではなく、ここではスピノザのことだ。これについてはすでに指摘がある。<sup>4)</sup>

しかし、これらの援用はかつてのヴィトゲンシュタインやハイデッガーの例のごとく哲学的・存在論的議論の深化、解明などを狙ったものなどではもちろんなく、彼の言説の文字通りの「援用」にすぎない。

形態の王国では観念はその対象と一致している。とはつまり、それが真実であり芸術形式の中でその表象を通じて作用しているということだ。それらはあ

る特定の時代に歴史的眞実として体験される存在の範例としてある。その追求の課程でハントケはセザンヌを使い、彼が作品の中でりんごや人物の顔などの「純粹で無垢な地上的なもの」を芸術の対象に高めたと言う。彼によれば芸術は次のようなものとしての形態をとることが可能でなければならない。

Das Wirkliche war dann die erreichte Form: die nicht das Vergehen in den Wechselfällen der Geschichte beklagt, sondern ein Sein im Frieden weitergibt. – Es geht in der Kunst um nichts anders. (LSV21)

» Sich einträumen in die Dinge « , » die wahren Ideen [.....] mit ihren Gegenständen übereinstimmen « (LSV26)

(» Unter Wirklichkeit und Vollkommenheit verstehe ich ein und dasselbe «) (LSV35)

これらはハントケ自身のことばではなく引用されて貼り付けられ、補強のためにちりばめられたものだ。最低限その程度のことばが理解されていれば読解には困らないだろうとおもわれる。問題は、ハントケの説明にあるのではない。すでに指摘したようにたとえば、1974年の *Pins parasol* への、また例の男への言及が、読者に語り手と同じ体験を与えることができるのかという点に、ハントケの目的は絞られねばならなかったはずだ。読者は語り手の執拗な試みを興味を持って読むが、再び繰り返すが、ちょうどハントケがエヴェレストへの登頂の体験記、ドラッグの経験を述べた文章に不十分さを感じるのと同じことがここでも繰り返されてはいないか。意図は確かに十分よく伝わる。それが特にセザンヌとスピノザの援用で体験というものの純粹性が示されれば示されるだけ納得はいく。しかしそれらの援用は本来あるべきではなく描写だけで目的を実現するべきだというのは無い物ねだりだろうか。説明の多さこそこの本の弱点とはなっていないかという危惧は拭えない。むしろ例の哲学者のことばを示



峻的に挿入することが、作品に深みよりも作者が最も忌避していたはずの観念を持ち込んではいないだろうか。

しかし『緩やかな帰郷』のゾルガーが地理的空間の追求をつうじて彼の現実を把握したのと同様、『サント・ヴィクトワール山の教え』でも作家はなにがリアリティを持っているか、また信じられる描写にはどのようにして近づけるかということを、手順を尽くして語ろうとしている。色彩に対する印象、特定の絵に対しての思い入れ、距離の問題など語られる全ては、印象深くセザンヌの作品と関連づけられながらよく書かれている。二重の視点の一方は絶えず自分の作家としての根拠を求める点に向けられている。Bildungsroman として読むならば、十分成功している。評者もそこに目を向ければ、引用された哲学者との比較などよりもするべきことが見えてくるはずだ。

一つ一つの挿話に何か不十分なものを感じさせながら、ここで独特の力を持っているものはそれらの細かい体験の集積であることが否定できない。上記引用の数例は典型的なものだが、まさにこの種の例の連続でこの小説はできている。その一つ一つを丁寧に咀嚼していくことを読者は強いられるが、それがあまりに小説の一場面としては個人的で些末なもの（1971年夏のユーゴスラヴィアのイトスギといったエピソードが旧作を呼んでいない者にどんなインパクトを与えられるだろう）にも関わらず全体として力を持つ。

色彩への印象がくりかえして描かれることはセザンヌの生活と作品との関連で当然のことだが、それらのエピソードがとられる場面が自分の回想の中からのということで、語り手の作家としての道筋を伝記的に跡づけることにもなり、サント・ヴィクトワール山周辺での印象風景としての枠組みしか持たないこの作品を継続させていく。

もう一度確認のために、最も典型的にこの作品を代表すると思われる一場面を引用しておく。

Ich ging bewußt langsam, im Weiß des Berges. Was war? Nichts geschah. Und es brauchte auch nichts zu geschehen. Befreit von Erwartung war ich, und fern von jedem Rausch. Das gleichmäßige Gehen war schon der Tanz. Der ganz ausgedehnte Körper, der ich war, wurde von den eigenen Schritten befördert wie von einer Sänfte. Dieser gehend Tanzende war ich-zum-Beispiel und drückte » die Daseinsform der Ausdehnung und die Idee dieser Daseinsform «, die gemäß dem Philosophen » ein und dasselbe Ding sind, doch auf zweierlei Art ausgedrückt werden «, in dieser vollkommenen Stunde *gleicherart* aus – Regel des Spiels *und* Spiel der Regel, wie einst der Gehende mit der flatternden Hose in Oberösterreich [.....] (LSV51,52) (下線筆者)

もちろんここでは方法論が展開されている。語り手が体験した例の哲学者の存在の形式に關することばの詮索は措いて、ここでの語り手の‘歩み’の描写はこの作品の文体の流れに実現されている。肝心なことは、具体的な内容が見えないながらも、存在と現象の完全な同一性が生じたことを思わせるところだ。誰かあるいは何かで‘ある’ものは、彼、またはそれであるという‘事態’と分離されない。この考えにセザンヌもとりつかれていた。彼の色は彼にとって‘noumenale Entitäten’であり、目に見えるものの背後にはなにも存在せず、その中に全てが見つけれられるということがセザンヌ芸術上の帰結だった。「魂は描かない。肉体を描く。うまく描ければ、なんと全体から魂が輝く。」というのはセザンヌのことばだったと思う。

ハントケの試みは現代の思考の流れの中に置いたとき、その中心から決して外れてはいない。現実認識の問題としてこの一世紀に明らかになってきたことは、厳密で確実な認識というものの不可能性ではなかったか。それは、形式化、ことばの自己言及性、といった用語で語られ、主観客観の一致による真理は、常にことばの形でしか存在し得ないということだった。問題はその限界のどこ

までハントケが接近できたかということにつきるだろう。上記の引用部には、その経緯が端的に示されている。踊るような歩みを体験しているのが「例えば私」(ich-zum-Beispiel)であるという造語を用いた表現は特に印象に残るものである。

## 注

Handke, Peter: Die Lehre der Sainte-Victoire, Frankfurt/M 1980 この作品からの引用はLSV頁で示す。

- 1) Quack, Josef: Die fragwürdige Identifikation: Studien zur Literatur. Würzburg 1991, S.101
- 2) Melzer, Gerhard: „Lebendigkeit: ein Blick genügt.“ Zur Phänomenologie des Schauens bei Peter Handke. In: Peter Handke Die Arbeit am Glück.Hrsg. v. Gerhard Melzer, Jale Tükel, Königstein/Ts, 1985 S.126-127)
- 3) Dinter, Ellen: Zu Peter Handkes zyklischer Dichtung:„Langsame Heimkehr“ 1979-1981, Köln/Wien 1986
- 4) Laemmle, Peter: gelassenheit zu den Dingen. Peter Handke auf den Spuren Martin Heideggers. Merkur 4, April 1981, S. 426f